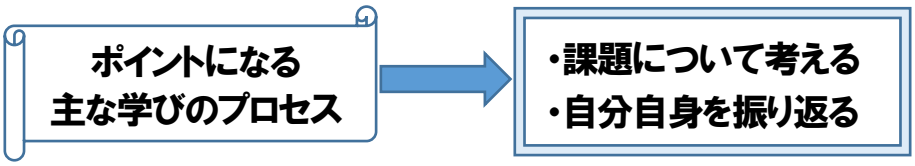
6-9　実践協力校における授業実践
事例⑨　小田原市立早川小学校
４年生　特別の教科 道徳



Ⅰ　指導計画

１．教材名　『ともだち　ひきとりや』(2002 年：偕成社) 作：内田 麟太郎　絵：降矢 なな
（「友情・信頼」）

２．指導目標

・友達とはどういうものかを多面的・多角的にとらえ、互いに理解し合い、友達と仲良くするために必要なことを考えることができる。

３．指導計画

	ねらい（◇）・学習内容（◆）
1	◇教材の登場人物やあらすじをとらえ、友達であるイタチをひきとってもらったときのイノシシの気持ちを考えることができる。 ◆教材を読み、イノシシがどのような性格なのかを考え、友達であるイタチをひきとってもらったときのイノシシの気持ちについて話し合う。
2 本時	◇物語の後半におけるイノシシの行動から、なぜ気持ちが変わったのか理由を考える中で、友達と仲良くするために必要なことに気付くことができる。 ◆教材を読み、イノシシの気持ちの変化をとらえ、友達と仲良くするために必要なことについて考える。

＊指導計画の作成にあたって、特別活動（学級活動）では、以下の内容を実施した。

1	◇自分の生活を見直し、頑張ってきたことやよいところを振り返ることで、自分や友達のよさに改めて気付くことができる。 ◆自己紹介カードを書き、発表し合う。

Ⅱ　本時の様子

1．本時の目標　〇友達をひきとってもらった後の主人公の行動や気持ちから、友達と仲良くするために必要なことを考え、友達を大切にしようとする心情を育てる。

2．本時の展開

「政治的教養を育む教育」の身に付けさせたい力の視点

過程	学習活動（活動の流れ）	ポイントになる学びのプロセス
導入	〇資料を範読する。 〇登場人物とあらすじを確認する。 〇前時の振り返りをする。 ・イノシシは、友達であるイタチを「子分」だと思っている。 ・自分が一番！　・友達なんかいらない。 ＊教材の内容と児童の意見が一目でわかる掲示を工夫する。	友達の考えを聞き、自分との共通点や違いなど、いろいろな意見があることに気付くことができる。
展開	**学習課題　イノシシの気持ちを考えよう** 〇イノシシが自分自身をひきとってもらったときの気持ちは？ （イノシシの気持ちの変化を考える） ・またイタチと遊べるかな ・いばった自分とはさよならしたい 〇友達と仲良くするために大切にすることは何だろう？ （イノシシは、これからどんなことを大切にしていくかな）	課題について考える 自分自身の生活を振り返り、友達との関係の中で、どのようなことを大切にしているのか、これから大切にしたらよいことは何なのかを考えることができる。
終末	〇友達と仲良くするために大切なことはどんなことかを考え、ワークシートに記入する。 ・優しい言葉で話す。 ・自分のことばかりにならず、相手のことも考える。 ・相手が嫌なことはしないようにする。 〇自分の考えを全体に発表する。	自分自身を振り返る **目指す子どもの姿** 自分の考えと向き合い、話し合いを通して感じたことをもとに、自分の思いを深めている姿。

Ⅲ　研究協議



1．自評

〇学級の実態をふまえ、教材を通じて「友達への接し方」について「自分のこと」として改めて考える契機とするねらいがあった。自分のことに置き換えて友達への行動を考える「振り返り」の時間を十分に確保することで、さらに目標の実現に近づけたと思う。

2．研究協議のテーマ　**＊令和元年度は共通テーマで協議を実施。**

〇提案授業における「学びのプロセス」（「身に付けさせたい力」の視点）につながる児童・生徒の姿とは

3．研究協議の成果と課題

成果・「課題について考える」については、教材設定が学級の実態に合っており、考える手立てができていた。

・「自分自身を振り返る」については、授業者が繰り返し「(教材の一場面について)そんな経験ある？」と問い直すことで、「ときには喧嘩した方がいいんじゃないか」などの発言が児童から出ていた。このような問い直しが、児童たちに「自分のこと」として友達との関係をとらえさせるきっかけになっていた。

課題・本時の終末において、振り返りでカードに書くことと、授業で話し合った内容とどちらを書いてよいかわからない様子の児童が見られた。また、道徳としての振り返りなのか、関連する学級活動での学習を含めた振り返りなのか、授業者が明確にして指導に当たる必要がある。

Ⅳ　実践協力校での授業実践を基にした指導事例

R1-1　小学校４年生　特別の教科 道徳　指導事例
「友情・信頼『ともだち　ひきとりや』」

【指導目標】
・友達とはどういうものかを多面的・多角的にとらえ、互いに理解し合い、友達と仲良くするために必要なことを考えることができる。

【目指す子どもの姿】
・自分の考えと向き合い、話し合いを通して感じたことをもとに、自分の思いを深めている姿。

1　指導の流れと「政治的教養を育む学びのプロセス」との関係

学　習　活　動	ポイントになる学びのプロセス
教材の範読を聞き、前半部分の主人公の気持ちを考える① **Ｔ：イタチをひきとってもらったとき、イノシシはどんな気持ちだったのかな？** Ｃ：俺様のいうことを聞かないイタチなんて、友達なんかじゃないから、いらない！ Ｃ：「子分」だと思っていたイタチが言うことをきかないから、「ひきとりや」がイタチをひきとってくれて、満足している。 Ｃ：俺様には、友達なんかいらないから、ちょうどいい。 Ｃ：だけど、ぼく、イノシシの気持ちがよくわかるよ。 Ｃ：私は、いばりんぼのイノシシなんて、友達になりたくないけどね。 Ｃ：ぼくは、イノシシと友達になれるよ！…… Ｔ：イタチをひきとってもらったときのイノシシの気持ちをワークシートに書きましょう。 **後半部分の主人公の気持ちの変化を考え、友達と仲良くするために必要なことについて考えよう①** **Ｔ：「ひきとりや」に「自分自身」をひきとってもらったとき、イノシシはどんな気持ちだったのかな？** Ｃ：「ひきとりや」にお願いするときの態度が変わったよ。 Ｃ：「俺様」っていう、いばった言い方をやめたね。 Ｃ：イタチへの意地悪を自覚したってこと？ Ｃ：あのときは「自分が悪かった」って思っているんじゃないかな。 Ｃ：「俺様」と言っていた、「いばった自分」とさよならしたい。 Ｃ：自分のプライドを捨ててまでも、イタチと遊びたくなったんだよ。 Ｃ：イタチと遊んで、また喧嘩したいと思った。 Ｔ：喧嘩をしたかったの？ Ｃ：イノシシにとって、イタチとの喧嘩も楽しみの一つだったんだと思う。 Ｃ：喧嘩のようで、気持ちはじゃれ合っていた、っていうか…。 **Ｔ：みんなには、そんな経験って、ある？** Ｃ：うーん、ときには喧嘩した方がいい。本音を言えない関係って何か違う気がする。 Ｃ：イタチと喧嘩ができなくなって、「大切な友達」って、気付いたんじゃないかな。 Ｔ：イノシシとイタチは、これからどうなっていくのかな？ Ｃ：イノシシは、今度はイタチの言うことを聞けばいいよ。 Ｃ：そうしたら、逆の「親分、子分」の関係になっちゃうよ。 Ｃ：それなら、お互いの言うことを聞けばいい。…… **Ｔ：友達と仲良くするために大切にすることは何か、ワークシートに書いてみましょう。**	**ポイント1** **○課題について考える** **ポイント2** **○自分自身を振り返る**

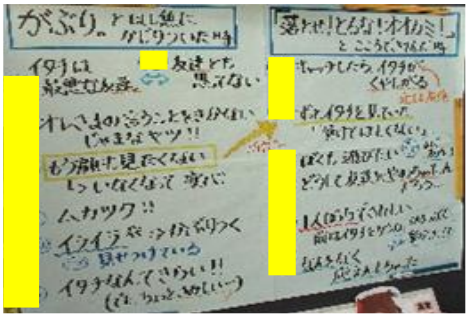
2　政治的教養を育むためのポイント

ポイント1　ポイント2

児童たちが「自分のこと」として考えるための手立てを工夫しましょう。

政治的教養を育むためには、児童たちが「自分のこと」として課題について考えることが大切です。

本事例では、指導者は、絵本を教材として「友達と仲良くするために大切なことはどんなことか」を考えることで、児童たちが自分自身と友達との関係をとらえなおすことをめざし、様々な手立てを工夫しています。例えば、教材の絵本に登場する主人公のイノシシの気持ちを共有する手立てとして、児童たちから出た意見を掲示物にまとめています。また、**授業者が繰り返し「(教材の一場面について)皆には、そんな経験ある？」と問い直すことが、児童たちが「自分のこと」として考える契機になっています。**



また、**政治的教養を育むには、発達の段階に応じた指導を継続的かつ系統的に進めていくことが必要です。**

本事例では、「特別の教科 道徳（友情・信頼）」の指導と、特別活動（学級活動）」における自分や友達のよいところに気付く活動を関連付け、教科横断的な指導をめざしていました。このように、教員が「学びのプロセス（政治的教養を育む教育の身に付けさせたい力の視点）」を取り入れた指導を、様々な教育活動の中で意識し、継続的に行っていくこと、さらに言えば、単発的な指導に終始せず、小学校から中学校へ、さらには高等学校や社会人へと、系統的な学習のつながりを意識して行っていくことで、児童・生徒の政治的教養は育まれるのです。



特別の教科 道徳（小学校高学年）における「政治的教養を育む教育」につながる授業展開例

T：「ひきとりや」に「自分自身」をひきとってもらったとき、イノシシはどんな気持ちだったのかな？
C：「ひきとりや」にお願いするときの態度が変わったよ。
C：「俺様」っていう、いばった言い方をやめたね。　～中略～
C：「俺様」と言っていた、「いばった自分」とさよならしたい。
C：自分のプライドを捨ててまでも、イタチと遊びたくなったんだよ。
C：イタチと遊んで、また喧嘩したいと思ったんだよ。
T：喧嘩をしたかったの？
C：イノシシにとって、イタチとの喧嘩も楽しみの一つだったんだと思う。
C：喧嘩のようで、気持ちはじゃれ合っていた、っていうか…。

授業者は、「教材の一場面と同じような経験をしたことがあるか」と問い直すことで、児童たちに友達との関係を「自分のこと」としてとらえ直すきっかけ作りをしています。

ポイント1

T：みんなには、そんな経験って、ある？
C：うーん、ときには喧嘩した方がいい。本音を言えない関係って何か違う気がする。
C：イタチと喧嘩ができなくなって、「大切な友達」って、気付いたんじゃないかな。
～後略～